

*明治29年日食組立式観測所写真に隠れた日米親善

よく古い資料を送ってくださる天文関係の古い資料収集家の小川誠治氏から送っていただいた写真(写真1)がある。この写真は財団法人科学知識普及会発行の「科学知識」の大正13年8月号に掲載されたもので、今これを眺めるとさながら東日本大震災の津波被害の写真のように見える。筆者はただこのように感じ、この写真をまるで津波の跡のようなど、眺めたのであるが、脚注にあった理学士中澤毅一氏の記事を読んでいくと感動した。小川誠治氏がこの記事全文も送ってくださったことに感謝する次第である。この記事を送っていただいたのは2010年4月12日のことであった。

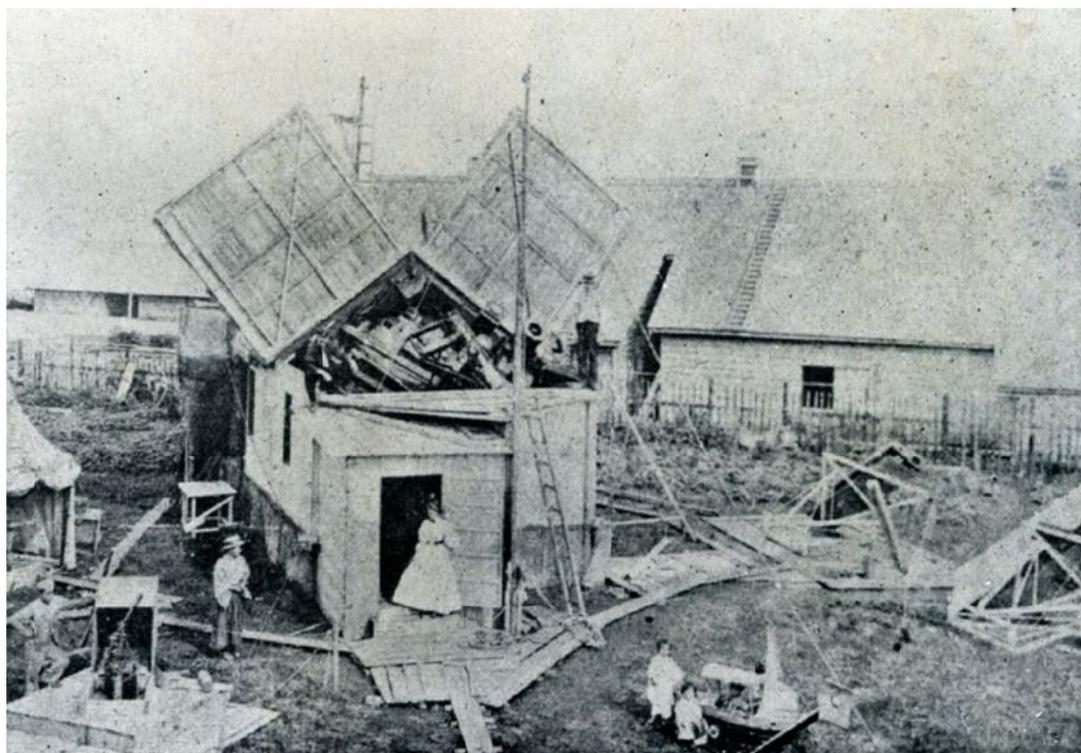


写真1 明治29年日食組立式観測所

写真の脚注には「明治29年、北海道枝幸に於て皆既日食が観測せらるべく、仏米2天文学者これが観測の計画を以て、組立式観測室を造り、携帯して遙々この地に來航せられた。この図は当時の観測室を撮影したものである。写真の古色蒼然たるは已む得ぬ所である(委しくは中澤理学士記事参照)」とある。

この脚注にあるように、この写真は明治29年8月に北海道北見枝幸であった日食を観測するためにやって来たアメリカのトッド博士の観測所だったのである。

この写真を送っていただいた際、同時に理学士中澤毅一氏の「皆既日食で恵まれた北見

枝幸」という記事も送られてきた。中澤毅一氏は天文学者かと思ったらタラバガニの調査に来たと書かれており、天文とは関係ない学者であった。この中澤氏の記事によれば不幸にして日食観測は雨天のため失敗したが、トッド博士と枝幸の人々との交流、親善が見事に描写されている。この記事には初代東京天文台長寺尾寿が登場する。

以下参照記事（出来るだけ忠実に再現したが一部現代仮名遣い、現代漢字に直した）：

「皆既食で恵まれた北見枝幸」理学士 中澤毅一

北海道の北見枝幸

北海道は菱形の島である。菱形の東北に面する一边は北見の国であって、オホツク海に面し、東南に走る海岸線が単調な直線で、陸も海も余りに価値がなさそうなところである。尤も南の方に網走、猿間、熊取等の潟があって海岸が一寸複雑しているが、何しても流氷が5月中旬まで（本年の如き）も襲来すると聞いては植民の勇気も失われる。

斯様な寒い北見の国で、北緯45度という北寄りに枝幸（えさし）という小さな町がある。私はこの6月、タラバガニの生態蕃殖調査という任務を帯びて北見海岸を旅行し、此枝幸に10日間滞在した。枝幸は甚だ不便な所で汽車から7、8里離れ、北の方浜頓別から小発動機で行くか、人家の無い山道を馬で交通するより外ない。所が不思議にも北海道としては珍しく早くから開けた所で、聞く処に依れば、明治16年、かの日本海に面する天塩の沖にある利尻島の漁夫が流されて此処に漂着したのが枝幸の起りであるという。成る程ロシアのマカロウが6、70年前北太平洋の海流調査をして以来知られ、日本海の水は宗谷海峡から北見の沿岸を洗って東南する急潮流をなしていることは有名な事実である。利尻の漁夫もこの潮に運ばれたのである。

日食の観測

枝幸に在る10日間に私の興味を最も多く惹いた話は、明治29年8月10日の日食にフランスのデランドル博士と米国のトッド博士が、日本の片隅であるこんな偏僻な地へ、米国軍艦で遙々とやって来て、然も観測器械から観測所の組立建物迄積み込んで、此地に完備せる日食観測所を設けたことである。不幸にも日食日の8月10日が雨天の為め観測することが出来ず、米国では軍艦を派遣する程の大計画であったにも拘らず不成功に終わったのは実に遺憾であるが、此事件が窺した結果は多きいものがあった。

明治29年と云うと、日清戦争が我国の大勝にて終結したが、続いて起こった三国干渉と云う不都合な横槍で、国民は少なからず憤慨していた時であるから、外国の軍艦が日本国土に来て上陸するなど聞いては、いたく心配したものであろう。殊にフランスは三国干渉の一国であるから、其学者は反感を抱かれたらう。然るにそんなことには少しも頓着なく、親しく枝幸人と交わり、学者の立場から土地の教育者を指導したのであった。

観測出来なかった日食日の翌8月11日は枝幸小学校の新築落成式であったから、両博士はそれに招待されて、東京天文台長の寺尾寿博士其他官民と一室に会し、両博士は有益な訓話をされ、寺尾博士はこれを通訳した。

枝幸に過ぎた洋書図書館

米国トッド博士は夫人同伴で来朝せられ、毎日観測所に於て熱心研究せられる傍ら、日本の民情を調べ、日本の国民性、勇気と愛国の精神が何処に胚胎するかに就て、非常に興味を持たれたと云うことである。其結果枝幸人を非常に愛する様になった。夫人も亦博士と同心一体となって枝幸を愛し、殊に日本画に興味を惹かれ、自ら日本筆を揮って日本画を試みたと云うことである。小学校の新築開講式に出席して、寺尾寿博士を始めとして、道庁の官吏及び此両博士及び夫人等が一枚の大判日本紙に寄せ書きせる掛軸に、トッド博士が日本筆を以て見事に蘭を描写されたるを見て、私は感服に堪えなかった。夫人は又植物学の研究者であって、此時多数の標本を採集して本国に持ち帰ったと云うことである。

トッド博士は枝幸人の温情に感激して、其好意に酬ゆる為めに、帰途直ちに横浜より数十冊の洋書を寄贈された。枝幸人は此謝意を受領して満足し、博士の徳を讃えていた。そして博士が出発に際して約束したる寄贈はこれ丈けと思ひしに、凶らずも5年の後、明治34年5月に至り洋書全部取揃えて951冊を寄贈されたのであった。

之等の図書は今枝幸小学校の保有する所となり、枝幸図書館という表札を懸けた。小さいがしっかりした図書館に蔵せられ、自由に閲覧の出来るようになっている。

私は校長から此図書館に案内されて、先ず図書目録を一覧し、其書の種類が広いのに驚いた。科学者丈けに科学関係の書物が多く、天文学は勿論（トッド博士の著書が5、6冊あった）物理、生物、地質、鉱物などより、水産、教育、農業に関する米国諸州の年報、大学の学報等尚多数の文学書をさえ含んでいた。そして何れも最新刊書にて西目の著書が多かった。

枝幸人は此広汎なる書物を多数寄贈されて、益々感服している。而して之を図書館に蔵してタトエ読む人は少なく（殆ど無く）とも、小学校附属として斯の如き意味深き書物であると云うことは、人類同胞相親しみ、互に情誼を篤くするの徳を養うことが出来ると云うている。

先年北海道大学より之等の図書を大学に寄贈しては如何と云う申出があった（個人からか或は公にかは知らぬが）、其際現校長の意見として、此図書館はタトエ枝幸には過ぎたるもので、誰も読む人がなく、或人は之を以て宝の持ち腐れと云うかも知れぬが、徳育を以て教育の第一義とする自分にとっては、決してそうは思えぬ。之は書物でなくて、実に立派な友情の結晶物である。トッド先生の高尚な友情が、先生の最貴重に思う図書となって表れ来たものである。図書は思想学理を万人に広め、人類を高尚ならしむる最大の機関で、トッド先生は之を信ずるが故に最貴重な贈物として書物を送られたのである。されば吾々はこの一千冊の書物の内に、其内容のみでなくトッド先生的人格を窺い、且つ人類同胞の友誼親交の美德を学ばなければならぬ。それは此図書が枝幸にあって始めて窺われ学ばれるものであって、他に移る時は単純なる書物になって了う。枝幸人の損失は単に書籍の問題ばかりではない、と云う意見に多数が感動して大学寄贈の事は止めになったと云う。之は誠に尊敬すべき意見である。

引用終わり

この記事にはいろんな考えさせられることが書いてある。この日食のあった頃は日本が日清戦争に勝って、下関条約によって中国の遼東半島の割譲を受けたことでフランス、ドイツ、ロシアの三国干渉を受けた時代であり、その干渉して来たフランスの日食観測隊を受け入れていること、またアメリカの当時アムハースト大学天文台長であったトッド博士が軍艦で日本の辺鄙な北見枝幸にやってきたこと。民主主義の権化のような国で軍学共同の事業が行われたこと、また家族同伴で日食観測に派遣されていることなど、筆者には目を丸くするようなことが書かれている。確かに写真 1 にはドアの前に長いスカートをはいた夫人が写っている。そして手前には子供らしき 2 人も写っている。日本で日食観測に自衛隊の艦船で出かけられようか、今は南極観測のために自衛艦が輸送をやっているが、これは一時大きな議論の末行われた。そして日本で日食観測に家族同伴が考えられようか。

この明治の時代、19 世紀末のこの記事に深く感銘した次第である。

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp